

特別寄稿 生かされて

岩国短期大学講師
元栗谷小学校校長
平垣内一江

アカシヤの白い花が咲くと、きまって思い出すのが満州(現在の中国東北部)から引き揚げてきた時のことである。学校や民家が焼かれ、恩師や沢山の友達を失って、大混乱の中で敗戦を迎えた。悔しさもさることながら、毎日うなり続けるサイレンの音や、B29の攻撃から逃げまどう必要がなくなったという安堵感は、子ども心に嬉しかったことを覚えている。

引き揚げ命令が出たのは、昭和21年7月12日、私達親子三人は、住みなれた家や数々の父との思い出を残し、いよいよ日本へ向かうことになった。持つことが許された物は、リュックと手提袋と水筒、それに一人3千円の現金だけである。私は、衣服を小さく丸めてリュックに詰め、手提袋には5年生の国語の教科書と、5歳の弟の大好きな絵本を1冊、あとはできるだけ沢山の乾パンを押しこんだ。母は、ハンカチに包んだ父の形見のベルトを一番初めに、あとは2人分の衣類を詰めていた。弟の小さなリュックには、タオルと常備薬と飴が入れられた。1週間分の食糧は、各自で用意しなくてはならない。母は、朝早くから豚肉のブロックを釜で茹で、薄く切ってから味噌漬けにした。それを詰めた2つのアルミの弁当箱は、ずっしりと重かった。

隣組の人達と迎えに来たバスに乗ると、すすり泣く声に包まれたバスは、ポプラ並木を通り、一路「鞍山」の駅へと向った。車窓からは、爆撃でやられた病院や学校、冬になるとスケートを楽しんだ池などが、どんどん遠ざかって行く。2時間ばかりたった頃、ようやく駅に到着した。そこには、すでに沢山の人が集まっていた。先程までのセンチな思いから一転して、まだ見ぬ日本への憧れの思いで、汽車の入るのを今か今かと胸をときめかせて待っていた。すると、今まで見たこともない汽車が目の前で止まった。

「えっ、これに乗るの?」私は、思わず母に聞いた。それは、木材や車に乗せる無蓋車に2メートルくらいの板囲いがしてあるだけのものである。雨でも降ってきたら大変なことになると思いながら、細い鉄の梯から上に登った。隅の方から順々に座らされ、足を伸ばすこともままならない。やがて、多くの人達を積んで長い列車は動き始めた。不安そうな顔を見合わせながら、当分の間みんなはだまりこんでいた。板囲いの隙間から少し外が見える。行けども行けども広漠たる大地にコウリャン畑が続く。真夏の太陽は、じりじりと容赦なく照りつけ、みんな汗びっしょりである。しばらくすると、班長さんの指示で昼食を取るようになった。やっとみんなの顔に笑顔が戻った。

どのくらい過ぎたであろうか。突然ガタンと駅でもない所に列車は止った。班長さんが、「ここで全員トイレをすませておいてください。短い時間なので、早く帰ってこないと置いて行かれますので注意してください。」と、言われたかと思うと、梯の近くの人からどんどん降り始めた。私は、慌てて近くの草むらで用をすませると、弟と一緒に急いで列車に戻ってきた。男の人や子ども達は、その辺でもよいが、女の人達はそうもいかない。少し離れた所から、ハアハア言いながら母は帰って来た。

発車の合図もなく列車は動き始めた。その時である。「ちょっと待ってください。まだ家内が戻ってきていません。おなかが痛いと言っていましたから…。」と、班長さんに必死で頼んでいる人がいた。「だから早くしてくださいと言っていたでしょう。ここからは、機関士に声が届きませんからねー。」板囲いの外からは、「待って一、待って一。」と、女の人泣き叫ぶ声が聞こえてくる。私達も、ありったけの声をふりしぼって、「待ってあげてくださいーい。」と、何度も何度も機関士に向って頼んだ。列車は、次第にスピードを上げ、私達の声は空しくその音にかき消されてしまった。残されたお母さんは、これからどう生きて行くのだろう。何もない野原の中で……。一瞬にして母親を失った幼い二人の子どもは、気が狂ったように泣きわめいている。どうにもしてあげられない悲しい現実には、私達はただもらい泣きをするばかりだった。

べとべとになった体で泣き疲れ、私はいつの間にか眠ったらしい。ふと目がめると、月明りに弟は母に抱かれ、二人ともすやすやと眠っていた。昼間の暑さはどこへやら、ここちよい風が頬をなでて通り過ぎて行く。しーんと静まりかえった列車は、満天の星に見守られながら、暗闇の中をひたすら「葫蘆

島」(現在のフルータオ)へ向って突進して行った。翌朝降ろされた所は、大きな収容所である。みんなは、痛かった足をゆっくり伸ばして、コンクリートの上でリュックを枕に横になって寝た。班長さんの声でたたき起こされると、一列に並んだ人から、DDT の白い粉を頭からいやという程ふりかけられた。

目の前には、大きな貨物船が待機している。そろそろと甲板へ上がると、今度はぼっかりと大きな口をあけた階段から、暗い船底へと降りて行った。そこは、体育館のように広々とした床が広がっている。端っこから順番に、今度は寝るだけの場所が与えられた。仮設のトイレが甲板に 10 個ばかり、その隣りに医務室が設けられている。食堂なんてしゃれたものはない。私達は、この動くホテルで 1 週間を過ごすことになる。食事の内容は、朝と夕食は小さなおむすび 1 個と藻の浮いたうすい味噌汁。昼食は、10 個ばかりの乾パンだけである。家から持参した食糧を補給したものの野菜類が全くない。

乗船して 2 日目頃から、雲行きが怪しくなり、次第に風雨が強くなり始めた。運悪く台風の到来である。船は上下左右に激しく揺れ、なすすべもない貨物船は、沢山の人を乗せ大海原で木の葉のように漂い始めた。私と弟は、青い顔をして母親にしがみついていたが、船が左右に大きく揺れる度にごろごろと転げまわり、2 日間は立ち上がることができない状態だった。吐く人、下げる人、蒸し暑い船内は、やがてものすごい臭気でまともに息もできない。気温が高い上に不衛生な環境から病人が続出。少ない医者と看護婦では間に合わない。

指折り数えて待っていた 1 週間がきても、一向に上陸の気配がない。そのうち死者が出始めた。亡くなった人は帆布にくるみ、ロープで海中に落される。その度に汽笛を鳴らし、その場を 3 回転しては進んで行く。私達は、手を合わせながら死者の数を数えた。やっと上陸の許可が下りたのは、1 ヶ月ばかりたってからのことである。私達親子も、もう少し遅かったら鱈の餌になっていた。

広島市は、特殊爆弾が落ち、全滅したと聞いていたので、私達には帰る当てがなかった。病気の子どもを日本へ連れて帰ってもと、母は海に身を投げて一家心中を何度も考えたそうである。ところが、ラジオの引き揚者情報を毎日聞いていた祖父が、佐世保まで迎えに来てくれていたのである。全く予期せぬ出来事に、4 人は肩を抱き合って泣いた。弟は入院のため母と佐世保に残り、私は祖父と湯来へ帰った。

毎日の医者の往診や、みんなの温かい看病のお蔭で、今日まで生き延びることができた。このご恩に報いるべく、社会のために少しでも奉仕できたらと考えている。

感謝

(注：上記は大竹市医師会会報 No.77 (2002.1.7 発刊) に寄稿されたものです)